

住居を中心とした生活行動の展開に関する比較研究

重村 力 平井 秀一

井上 赫郎

井上 隆

まえがき

この研究は、住居を中心とした日常生活行動の展開のあり様を、都市と農村、また都市内における個々の生活者のその差異に注目することによって、今日の生活空間の諸問題の解明に役立つ方法的視点を確立することにある。

1. 「住む」—— 時間的空間的概念

「住む」という言語は、「澄む」に通じていることからわかる様に、一定時間における一定空間（領域）への滞在＝定着を意味し、また一定のより広い空間（領域）の中での多様な時間的分布（日常生活行動）＝移動の中での相対的な一定空間への滞在を表わしている。

2. 定住概念の相対化

しかしながら「住む」という言葉に与えられた意味は、今日では、例えば30年前に比してきわめて変容している。例えば都市生活者にとってみれば、居住年限の著しい短縮や、住居に与える意味や機能の変化が挙げられ、また農村生活者にとってみれば、より広い生活圈や技術体系に対応する過程での、住居の意味と機能の変貌を挙げることができる。これらは、前記の時間的、空間的概念である「住む」「暮す」という概念、言いかえれば、定住＝生活という概念の相対化であるといってもよい。

3. 住居を核とする同心円の段階領域——その普遍的構造と変容

上記の現象は、かつて都市的な「（定住）生活」、農村（村落）的な「（定住）生活」等と漠然と捉えられてきた差異に比して考えると、それをも上回る差異を示していると考えられる。現実の都市や、農村（村落）はこれらの変容の集積（総合）によって、その空間秩序の変貌と混乱をきたしているわけである。

本研究では、これらを都市や農村という組立てられた結果を考察するのではなく、個々の生活者の側から捉えられる、住居を核とする日常生活行動の場としての、同心円の段階領域が、どのような今日の変容を示しているかを捉えようとするものである。

研究の構成

当報告は大別して2篇にわかれ、最も発達した大都市としての東京における分析と、農村における事例としての富山県城端町の農村集落における分析の2篇からなっている。

東京における分析では、東京都区部の中の典型的な住宅地である5地区を選んだアンケート調査によって、主として定住性の問題と、日常生活行動の問題を分析し、これらを家族単位による「型」として分類化した。また城端町における分析では、二つの農村集落を対象に、主として家屋敷プランの変貌とその意味の分析、また集落域の生活空間における土地利用の変化と土地認識の変化（方言地名の分析を媒介に）の考察を行った。

<都 市 編>

東京都区部における日常生活行動展開領域の類型的分析

目 次

1. 都市生活分析における原理的考察

- 1-1 生活行為分類の各氏法について
- 1-2 生活・時間-空間グラフの提案
- 1-3 生活型・定住型・空間型と時・空グラフ
- 1-4 定住型による分析法について
- 1-5 生活型による分析法について
- 1-6 調査の概容と調査地区

2. 定住型による検討

- 2-1 住宅地における異なる居住長さをもつ人々の混在
- 2-2 転居から入居まで
- 2-3 居住の長ささと定住志向性
- 2-4 定住の条件
- 2-5 四つの定住型とその特性

3. 生活型による検討

- 3-1 生活行動展開領域の分析法
- 3-2 8つの生活型による分類集計
- 3-3 8つの生活型の特性

4. ま と め

- 4-1 定住型・生活型と他要素との相関について
- 4-2 定住型・生活型の計画方法概念としての適用の展望
- 4-3 研究の問題点と今後の課題

本概要報告では、前記総目次の内、①調査概要、②定住型とその特性、③生活型に関する集計について報告する。

1 調査の概要

アンケート調査は、東京都区部の典型的地区を5地区選定し、そこでの5～10 ha程度の街区で、悉皆的に世帯主対象に実施した。（昭和51年3月）

サンプル数は、各地区あたり200前後を目途に設定した。地区の選定は、地区の市街地形成時期、人口密度、住宅特性、都心との距離に着目して行なった。対象地区の概況と、回収状況については以下に示す通りである。

表-1 5地区の概況

	人口密度（S50）	地区特性
① 江東区千田	300.0人/ha	住工商混在
② 中野区中野本町1丁目	330.9人/ha	高密・木賃アパート
③ 港区赤坂7丁目	157.3人/ha	都心・高層マンション
④ 世田谷区経堂2丁目	238.8人/ha	中密・持家中心住宅地
⑤ 練馬区谷原6丁目	102.0人/ha	スプロール・建て売り

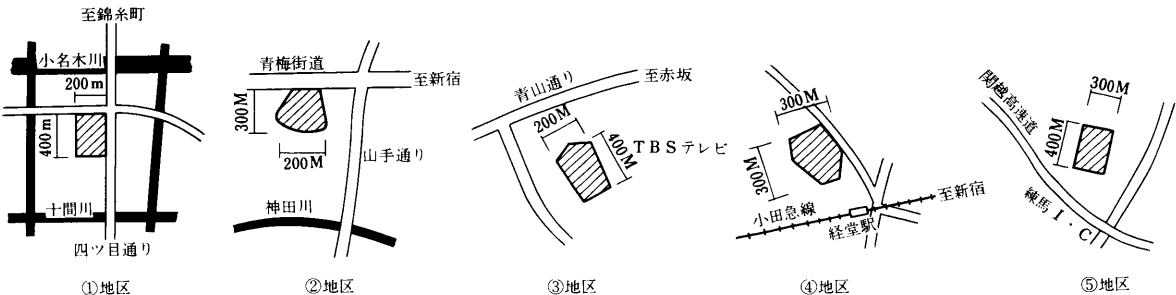


図-1 地区案内図

表-2 回収状況

回 収	配 布	回 収	回 収 率
① 江東区千田	281	201	71.5%
② 中野区中野本町1丁目	200	147	73.5%
③ 港区赤坂7丁目	192	127	66.2%
④ 世田谷区経堂2丁目	238	187	78.6%
⑤ 練馬区谷原6丁目	239	173	72.4%
計	1,150	835	72.6%

※ 尚、調査時期の関係もあり、全体的には、木賃アパート居住世帯のサンプルは、実態より相対的に少なくなっている。

2 定住型とその特性

大都市（東京）における地区を考えた場合、地区のまとまりが、そのまま地縁的なコミュニティになりにくい大きな理由に、

- ① それぞれの居住者がこれまで住みつけてきた年数、またそこに住みつけようとしている予定の年数が大きくくいちがうこと。
- ② 居住者それぞれが、日常生活において、その地区や、地区に置かれた住居に関わっている時間と、空間に与えた意味や役割（機能）が、大きく異なっていることが多いこと。

の①、②二点を挙げることができる。

これはまえがきで述べた、移動と滞在という視点で定住生活の領域に対応させてみると以下の様になる。

①は比較的長期な時間、すなわち数年から世代、生涯、あるいはそれを超える時間に対応し、地区的なスケール（近隣スケール）の空間に対応する。住みかえや引越し、移住、離村、人口の都市集中といった居住地移動の問題はこれらの集積である。

⑧は比較的短期な時間、毎日からせいぜい年単位の、住居を核とする生活圏のひろがりという空間領域に対応する。

在宅時間や、住居の機能性、意味性、近隣とのかかわり、休日の過ごし方、盆暮ヴァカンスの帰郷やレジャー、墓参り等の移動（日常生活行動）が相当する。

この研究では④、⑧それぞれにおける移動性を類型化することをめざし、それぞれ、④定住型、⑧生活型と名づけている。

また、これらの類型化を生活者個々において分析するか、それらの総合としての家族単位で分析するかは難しい問題を含んでいるが、本研究では、15才以上の家族構成員を総合化した家族単位での分析を行った。

(a) 4つの定住型

横軸に地区での居住年数、縦軸には現在の地区への定着の意志、離脱の意志を示して表化すると、下記の4類型を分けることができる。（表-3.4参照）

（後述するが短い、長い判定は大都市であるため3～5年がふさわしいが、ここでは一応5年を分れ目に考えた）。

表-3 定住の4類型

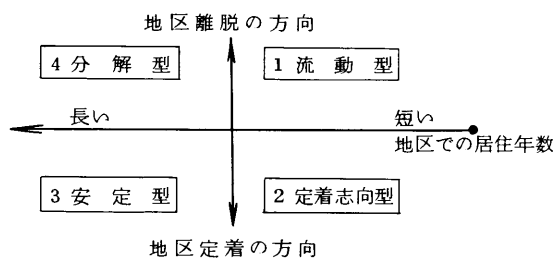


表-4 4つの定住型の内容

4 これまで住みつづけてきたが、 内的外的理由によって住みつ づけられなくなってきた人々。	1 この地区に住みはじめてから の時期も短かく、間もなく他 所へ移ろうとしている人々。 内的外的な理由から住み移り 続けざるを得ない人々。
3 住みつづけており、これから も住みつづけようとしている 人々。	2 住みはじめて間もないが、住 みつづけよう、できれば住み つづけたいと考えている人々。

一般には、1から2、2から3、3から4へと変化する可能性があるといえる。これら四類型による地区の把握は、地区の動態的な把握を可能にし、地区のもつ矛盾の解明に役立つといえる。一般の居住地で考えると、この1～4までの居住者の分布構成が、そのままその地区でのコミュニティーの大きな問題を示す。

この定住類型を、地区との関わり方の相違でみてみると表-5の様になる。

表-5 定住類型と居住者の地区との関わり

4 居住年数は長く地区との関わりはかつて深かったが、それ をとりまく条件が変化してき つつあり今ではこの地区を媒 介にした関わりよりも他の関 わりを重視しようとしている。	1 地区との関わり方は便宜的で ある職場や仕事場との近接が 住居選定の理由になっている 場合、その関係が地区と居住 者との重要な関係になってい る場合が多い。住居は総じて 不十分であり、時には住居の 場所ということ以外、ほとん ど地区との関わりがないこと も少なくない。
3 居住年数は長く、地区との関 わりは大変深い。この地区を ぬきにしては生活が考えられ ない。	2 居住年限は短かいが、この地 区での居住を媒介にして、地 区との関わり方が増えてきて いる。子供がその媒介となる ことも多いが、その他日常の 近隣関係の発生が考えられる。 この型ではこの関係をできれ ば、維持したいと考えている。

家族構成、住居類型と定住類型

これらの定住類型は、家族構成とどう対応するだろうか。様々な関係の錯綜している現代大都市の状況では、これらの厳密な対応を考えるのは困難であるが、大まかに次のことが言えると思う。

①流動型居住者には、単身者や小家族世帯が多く見られるが、絶対的ではない。②定着志向型居住者は、若年から壮年にかけての世帯が多い。③安定型居住者はさまざまである。④分解型居住者には種々の典型がみられる。内的な理由によって地区を離れようとしている型では、一般世帯の老年核世帯化からさらに老年単身世帯化して不安定となったケースや、一般世帯からの世帯分離が他の地区へ出て行くケース等がある。また外的な理由によって、地区を離れようとしている型では、道路の拡巾等による環境悪化や、アパートの急増による居住者構成の変化等を嫌って、出て行くケースや転勤や仕事場の変更によって居住地を変更するケースがある。

住居類型と定住類型との相関はやゝ明瞭にみる事ができるが、データに沿って後述したい。

環境の要求と定住類型

これらの定住の4類型は、それぞれ居住者層として、地区に対して、どのような要求や、環境の質、イメージを求めるだろうか。現代都市で、コミュニティーが円滑に育たない最大の理由は、これらの要求の背後の空間像が混在し、近隣という場を媒介にぶつかりあっていることから起っているのである。

表-6はこれらの環境の要求と各類型との対応を示す。

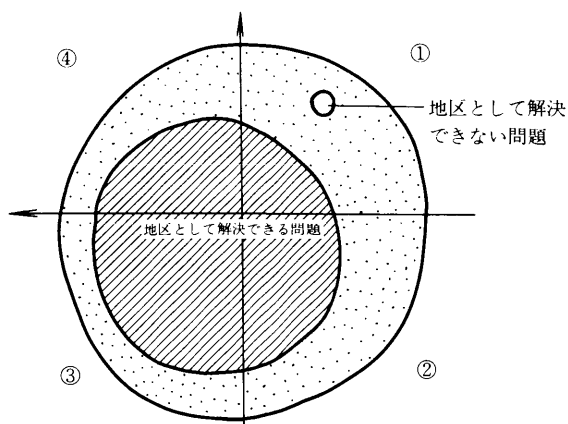
表－6 環境への要求

(都内 滝野川地区の例)

4 長く住んではきたが、環境が変化してきたり、新しい人が入ってきて、つきあいや人情も変ったり、また自分の家の家族構成が変化した等の状況がある。この地区に老人センターや集会所等入とのつきあいを回復して安心して住み続けられるための施設・広場・公園や住宅の地区改良等が望まれる。	1 住居の絶対的な不足が問題となっている。この地区に住居を選定した理由に応じて2つの異なる類型が考えられる。一方はどうしてもこの地区に比較的短い期間入居する住居が必要である場合、他方は必ずしもこの地区に限らず、公的な住居の建設が望まれている場合である。
3 この地区での生活が長いために、地区との関わりはきわめて深い。落ち着いた環境が維持されること、現状の環境悪化が修復的に改善されることを望んでいる。	2 この地区で永続して居住して行くためにより安心して住める住居をこの地区内に渴望している。地区との関わりはまだ浅いが、様々なコミュニティー施設や、保育所、子供の遊び場等の生活施設の充実を望んでいる。

地区として何ができるか。

こうした様々に異なる定住類型に対応する人々が混在して居住している地区では、地区としてどのような解決が可能だろうか。この問題は図－2の様に考えることができる。



図－2 地区として解決できる問題

都市は様々な問題が複雑に錯綜して構成されていることにその特徴があり、一居住地を切りとって考えてもその地区が孕んでいる問題は、場合によっては国土規模・世界規模の問題が関係してくる。だが問題を限定して考えてみれば、地区の中で考えることのできる問題は、予想外に大きいといえる。安定型の人々の抱える問題は、地区的に解決できる問題が最も多く、4の分解型、2の定着志向型の人々はこれにつき、1の流動型は最も地区的に解決できる度合いが少ないといえるが、その流動

型に対しても、公的住宅が絶対的な量として不足している部分をこの地区で引き受けることはできないにしても、都市が引き受けるべき一定の流動的住居の地区とは切り離せぬ量を、この地区に建設し、少しでも現状を改善することができる。地区的に解決できる問題を整理してみると表－7のようになる。

表－7 地区的にとりうる施策例

4 ●福祉生活保障的な地区施設の充実 ・住民クラブ・老人センター・地区センター ●老朽住宅の改良 ・長屋の改良等地区改良 ●狭小住宅の共同化	1 ●住みかえ拠点型住宅の建設 ・公営住宅の建設 ●住居補完的な地区施設の充実 ・公衆浴場・洗濯センター ・図書館・青年センター ・集会施設
3 ●近隣環境の整備 ・個別建替の方向の誘導 ・相隣環境の調整 ・商店街の整備 ・環境破壊からの防衛	2 ●コミュニティ生活育成的な地区施設の充実 ・保育園・幼稚園・学校 ・集会所・公民館・成人学級 ●狭小住居の解消 ・木質アパート再開発

(b) 定住型による居住者の分類

一定住類型の実態把握の方法－

前記の定住類型の、実態把握について、前記5地区でのアンケート調査によって試みた。アンケートの項目は、以下に示す居住の長さや定住意向についての2問により試みた。

質問Aにおける居住の長さは、その軸を5と6の中間においた。即ち、昭和44年までに入居したとする回答は長い、それ以降は短いという形で2分した。これは、東京都区部において、平均的居住年限が5年程度(年間流動率20%程度)であるという点や、23区で実施されている世論調査等で区民意識を有する変換点が、居住年限5年程度を境にしている点(例えば、区長の知名度、地域社会組織の加入等)に着目して、5年をひとつの分岐点として設定した。

質問Bにおける、定住志向は、2と3の中間にその軸をおいた。即ち、「住んでいたい」とするか、「引越したい」とするかによって2分した。但し、質問Bで3,4回答でその引越先について、1.この近くへ、とする回答は、地区をベースに問題をたてた関係上、居住年限の短い者にだけ、定着志向型とした。

表－8 質問A・居住年限

現在のところに住まれた時期はいつですか。

〔現在のところに住んだ時期〕	
1.	生まれたときから
2.	戦前から
3.	昭和20年代に入居
4.	昭和30年代に入居
5.	昭和40～44年に入居
6.	昭和45～49年に入居
7.	昭和50年以降に入居

表－9 質問B・定住志向

現在のところに今後も住んでいきたいと思いませんか。

1. いつまでも住んでいたい	条件は	1. 住宅の条件が良くなれば
2. 条件が許せば住んでいたい		2. 近所の条件が良くなれば
3. できれば引越したい		3. 家族の事情が許せば
4. すぐ引越したい	どこへ	1. この近くの別の場所へ
5. わからない		2. 東京23区内のどこかへ
		3. 東京以外のところへ
		4. 故郷、実家へ
		5. どこか環境の違った地域へ
		6. どこでもよい

表－10 定住型の分類方法

質問B		1. 2 ㊟	3. 4 ㊿
質問A	1～5 居住 ㊟	安定型	分解型
	6. 7 居住 ㊿	定着志向型	どこへ
			1 定着志向型 2～6 活動型

以上の様な集計操作により、5地区における以下の数値を得た。

表－11 地区別定住類型集計結果

	安定型	定着志向型	流動型	分解型	計
1地区 江東区千田	102 61.8%	15 9.0%	11 6.6%	37 22.4%	165 100%
2地区 中野区中野本町	70 56.9%	17 13.8%	20 16.2%	16 13.0%	123 100%
3地区 港区赤坂	35 34.6%	37 36.6%	18 17.8%	11 10.8%	101 100%
4地区 世田谷区経堂	73 48.3%	30 19.8%	28 18.5%	20 13.2%	151 100%
5地区 練馬区谷原	50 33.3%	44 29.3%	28 18.6%	28 18.6%	150 100%
計	330 47.8%	143 20.7%	105 15.2%	112 16.2%	690 100%

※ 有効票のみ

(c) 地区と定住型

〔地区No.1 江東区千田〕

古くから住む居住者が多く、安定型が極めて多い。新しい居住者も定着志向型の方が多く、地域社会の成熟がうかがえる。住・工混合の高密度地区であるが、定着の方向が強く、居住地の選択に一定の動機があると思われる。

※ 現住地への入居動機として「職業の関係（自営業が多い）」や「地域への愛着性」という地域社会的関係が多く、前住地も江東区あるいは隣接区が多く、居住地の限定性がみられる。

〔地区No.2 中野区中野本町1丁目〕

安定型の構成比が高いが流動型が次いでおり、2つに分解している。木質アパートの密集した高密度地区であり、居住者の更新がなされ古い居住者が安定型に、新しい居住者が流動型にといった形での分解が起きている。

※ アンケート調査のサンプルとしては、木質アパート居住者が少なくなっているため、実態としては流動型がもっと多いと予想される。

〔地区No.3 港区赤坂7丁目〕

新しい居住者が非常に多く、定着志向型の構成比が高い。比較的、高級なマンション立地がめだつ都心地区であり、利便性に恵まれ、定着志向型が高くなっているものと思われる。

※ 入居動機は、「仕事の関係」が多いが前住地や近隣関係等から居住形態の多様性がみられ、定着志向型からスムーズに安定型に移向するか疑問である。

〔地区No.4 世田谷区経堂2丁目〕

全地区の平均的な傾向を示している。古い居住者が安定型であり、新しい居住者が、流動型と定着志向型に2分されている。戸建て持家に木質アパートが加わった東京の平均的住宅地であり、地区内での居住者の更新テンポが定まっている。

※ 現住地への入居時期が、比較的均等であり、多様な居住歴をもつ居住者で地区が構成され、転出入動向も一定であり、平均的といえる。

〔地区No.5 練馬区谷原6丁目〕

定住4類型がほぼ均等に構成され、他地区に比べて離脱意向が強く、流動型が最も多い地区である。いわゆるスプロール地域で低密であるが、戸建て持家が大半であるにもかかわらず、定着意向が弱い点が問題とされる。

※ 入居動機が「土地の価格の手頃さ」が多く、地域選択に物的、社会的環境への要因が少なく、そのことが結果として流動型・分解型を高めていると思われる。

〔まとめ〕

以上の地区における居住者の構成を定住類型により把握した結果、地区と居住の関わりが端的に表現されていることがわかる。

即ち、定住構造とその問題性がうき上ってくるのである。

(d) 住居の型と定住型

住宅の建て方、所有形態、構造により、住居類型として9分類し、類型別に定住タイプの構成をみた。

〔類型1 戸建て持家〕

古い居住者が多く、安定型が極めて多い。新しい居住者も定着志向型で、流動型はほとんどない。今日の大都市居住において、戸建て持家の居住は定着を前提にしていることが実証される。分解型は約16%になる。

〔類型2 分譲マンション〕

安定型と定着志向型が多く分解型は少ない。戸建て持家層に比べると流動型が高い。分譲マンションの居住形態は、必ずしも定着しているとはいえないが、現在は定着志向型といえる。

〔類型3 民営借家(戸建て)〕

本調査では、新しい居住者が多く、定着志向型が一番高い。住居の質にも影響されるが、賃貸での住居としては、定着志向性が最も高い。

〔類型4 木賃アパート〕

新しい居住者が多く、流動型が非常に多い。また、古い居住者でも分解型が多く安定型は極めて少ない。東京23区で約100万世帯が木賃アパートに流動を前提に居住していることになる。

〔類型5 賃貸マンション(R・C造)〕

新しい居住者が多く、流動型と定着志向型に2分されている。安定型は極めて少ない。マンションでも分譲と賃貸では、全然異なる定住タイプを示している。

〔類型6 公営住宅〕

公営住宅の形態によって異なると思われるが、本調査では大規模団地は含まれていない。分解型が極めて高く、新しい居住者でも、定着志向型と流動型に2分される。

〔類型7 給与住宅〕

新しい居住者では、定着志向型、古い居住者では、分解型と、定着、離脱の方向が2つに分解している。公営住宅と給与住宅においては、定着志向型と分解型に2分されていると思われる。

〔類型8 長屋〕

〔類型9 その他分類不能〕

長屋のサンプルが少ないため、その他(併用形態等)とあわせて、定住タイプをみると、4類型にほぼ均等に構成されている。

〔まとめ〕

以上の住居類型別の定住タイプの構成をみると、明らかに住居類型により定住タイプに一定の傾向がでている。それらの関係を整理すると、下図のような位置づけができる。

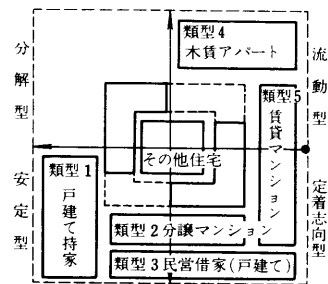


図-5 住居類型と定住型

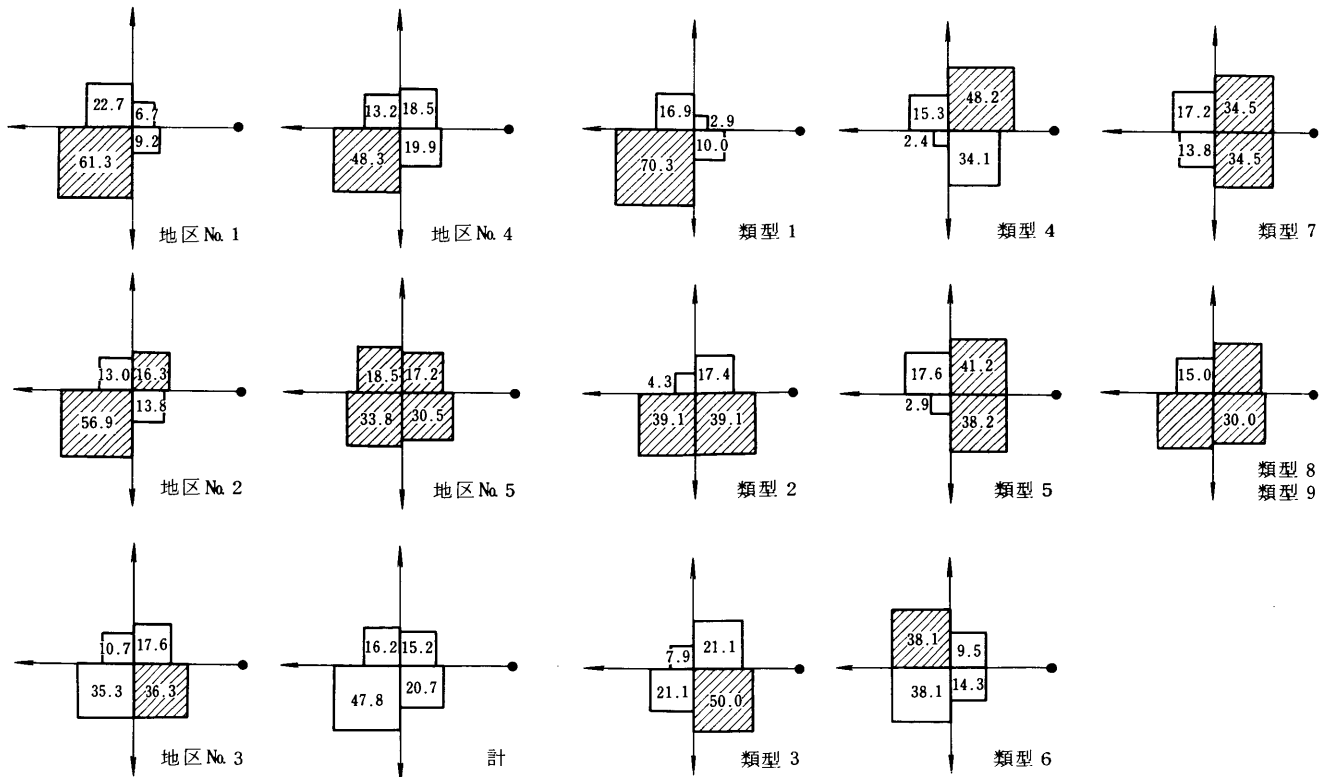


図-3 地区と定住型 (数字は構成比%)

図-4 住居の型と定住型 (数字は構成比%)

Ⅲ 近隣空間領域での社会的関係性（近隣性）

表－14 Ⅲ. 近隣空間領域での社会的関係性の判定

● 近隣施設利用

あなたの御家族のどなたかが、近所（歩いて10分位の範囲）で週に1回以上利用される場所は何ですか。
次にあげる場所のうち該当するものを全て選び○をつけてください。

1. 喫茶店	6. コイン・ランドリー	11. 居酒屋	16. 老人施設
2. パチンコ屋	7. 麻雀屋、基会所等	12. 深夜スナック	17. 町会・自治会事務所
3. 銭湯	8. 食堂・レストラン	13. 図書館	18. その他
4. 散歩道	9. 保育所・託児所	14. 友人・知人宅	〔 〕
5. 公園	10. 商店街	15. 映画館	

（注） 該当No. 3・6・8は住居補充施設として除外 該当施設数2以上 ○ 0又は1 ×

● 近隣つきあい

あなたの御家族の近所の方とのつきあい方について、以下の項目に該当する家があるかどうかおききします。
あるかないのいずれか該当するものにそれぞれ○をつけてください。

1. 特に用事がなくても訪問しあい世間話をしたり、家庭内の事も相談する。	1. ある 2. ない
2. 日頃から親しくして気のおけない間柄であるが、家庭内の事までは立ち入らない。	1. ある 2. ない
3. 立ち話をしたり、一諸に買い物をしたりする程度のつきあいをする。	1. ある 2. ない
4. 町内会の行事や催し物など必要があればつきあう程度である。	1. ある 2. ない
5. 会ってあいさつをする程度のつきあいをする。	1. ある 2. ない

（注） 回答5は、一般的なもので除外 1～4のうち、該当数2以上 ○ 0又は1 ×

Ⅳ 都市広域の領域への生活行動の発展性（広域性）

表－15 Ⅳ. 都市広域の領域への生活行動の発展性の判定

● 買い物の場所と買い方

あなたのおたくで、日用品（食品、雑貨品等）はどこで買いますか。また、その買い物はどのようになさいますか。
該当するものを、それぞれ1つ選びその番号に○をつけてください。

〔日用品を買う場所〕	〔買い物のやり方〕
1. 近所の商店街へ歩いていく	1. ほぼ毎日買う
2. バスカ車を利用してよりの商店街やスーパーへいく	2. 比較的まとめて買う
3. 電車等を利用してターミナルのデパートや盛り場へいく	
4. その他〔 〕	

（注） 回答 1・2は×, 3・4は○

回答 1は×, 2は○

● ショッピング・レジャーに行く場所

10. 日用品以外のショッピングでよく行く所 地 名 (15才以上の方だけ)
11. 映画、飲食、人と会う等のためによく行く所 地 名 (15才以上の方だけ)

（注）近隣以外地名あり ○
近隣のみ地名なし ×

● 職場、学校までの時間

就業地、通学地までの時間

1. 住居と同じ
2. 歩いて10分未満
3. 10分～20分未満
4. 20分～30分未満
5. 30分～60分未満
6. 60分～90分未満
7. 90分以上

（注）回答1～4は×, 5～7は○

(c) 8つの生活型

さきのⅠ～Ⅳの4要素を用いて、この4要素を＋に判定できたとすると、4要素の組合わせは $2^4=16$ の以下の組合わせとなる。

表－16 4要素の組合せ

(＋は○，－は×)

	Ⅰ 家の社会的成熟度	Ⅱ 住居の機能的依存度	Ⅲ 近隣性	Ⅳ 広域性
1	○	○	○	○
2	○	○	○	×
3	○	○	×	○
4	○	○	×	×
5	○	×	○	○
6	○	×	○	×
7	○	×	×	○
8	○	×	×	×
9	×	○	○	○
10	×	○	○	×
11	×	○	×	○
12	×	○	×	×
13	×	×	○	○
14	×	×	○	×
15	×	×	×	○
16	×	×	×	×

以下の組合せが成立する生活型について考え適当な名称を与えておく。

表－17 生活型の判定と名称(案)

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	
1	○	○	○	○	A ₁ 広域定着型(コミュニティ型)
2	○	○	○	×	B ₁ 地域定着型(下町型)
3	○	○	×	○	C ₁ マイホーム型
4	○	○	×	×	D ₁ たこつぽ型
5	○	×	○	○	A ₂ 広域定着型(コミュニティ型)
6	○	×	○	×	B ₂ 地域定着型(下町型)
7	○	×	×	○	C ₂ マイホーム型
8	○	×	×	×	生活型を形成せず
9	×	○	○	○	E ₁ 地域生活基地型(前進基地型)
10	×	○	○	×	E ₂ 地域生活基地型(前進基地型)
11	×	○	×	○	F ₁ 広域生活基地型(根拠地型)
12	×	○	×	×	D ₂ たこつぽ型
13	×	×	○	○	G ₁ 寄生型
14	×	×	○	×	G ₂ 寄生型
15	×	×	×	○	H ₁ ねぐら型
16	×	×	×	×	生活型を形成せず

上記の集約化によって、16類型から8つの生活型への組合せに絞ることができた。各要素毎にこの生活型との関係を確認すると以下の様になる

表－18 4要素と8生活型の関係

Ⅰ 家の社会的成熟性

A 広域定着型(コミュニティ型)

＋ B 地域定着型(下町型)

C マイホーム型

―― D たこつぽ型

E 地域生活基地型(前進基地型)

－ F 広域生活基地型(根拠地型)

G 寄生型

H ねぐら型

Ⅱ 住居への機能的依存度

D たこつぽ型

＋ E 地域生活基地型(前進基地型)

F 広域生活基地型(根拠地型)

A 広域定着型(コミュニティ型)

B 地域定着型(下町型)

G 寄生型

C マイホーム型

－ H ねぐら型

Ⅲ 近隣空間領域での社会的関係性(近隣性)

A 広域定着型(コミュニティ型)

B 地域定着型(下町型)

＋ E 地域生活基地型(前進基地型)

G 寄生型

―― C マイホーム型

－ D たこつぽ型

F 広域生活基地型(根拠地型)

H ねぐら型

Ⅳ 都市広域の領域への生活行動の発展性(広域性)

A 広域定着型(コミュニティ型)

C マイホーム型

＋ F 広域生活基地型(根拠地型)

H ねぐら型

―― E 地域生活基地型(前進基地型)

G 寄生型

B 地域定着型(下町型)

－ D たこつぽ型

表-19 8つの生活型の概要

	I. 家の社会的成熟度	II. 住居の機能的依存度	III. 近隣性	IV. 広域性	家族イメージ	職業イメージ	住宅イメージ	地区イメージ	金魚マップ
A 広域定着型	・あり ・家としての成熟性が高い。 ・故郷・実家になっ ていることが多い。	・職業により多様 ・家族構成により多様	・あり ・地域社会との関係が強い。 ・一定の居住年限の積重ねあり。	・職業や年齢により異なるが、基本的に行動領域が広い。	・家族人員は多く、世帯主の年齢もまあ高い。 ・地区居住が長い	・管理職やインテリ層 ・ホワイトカラー	・戸建て持家	・比較的成熟した住宅地	(A)
B 地域定着型	・あり ・先祖代々の家の場合あり。	・あり ・職住近接あるいは一体的な場合が多い。	・あり、極めて強い ・職業を含め、日常生活での依存が、非常に強い。	・部分的にはあるが、基本的には近隣で完結している。	・先祖からの居住 ・3世代家族等も多い。	・圧倒的に自営業 ・中小商工業の自営業	・戸建て持家 ・職住近接あるいは一体的となっている。	・下町的な産業地域社会 ・住・商・工業在地区	(B)
C マイホーム型	・あり ・生活の積み重ねにより、段階は異なる。 ・第一義的に価値をおいている。	・個人により多様 ・一般的には、規則的に位置づけられている。	・あまり強くない。 ・住居から広域へ直接つながっている。	・近隣を補完するものとしてある。	・核家族が中心 ・比較的若い夫婦層が多い。	・多様だが、ホワイトカラー層が中心が多い。	・一応持家中心だが、地区特性により多様 (ex. マンション) ・第1義的価値	・ほぼ全域的であり、特に住宅地では多い。	(C)
D たこつぼ型	・多様 ・生活行動の質に関係。	・あり、極めて強い ・基本的に全生活を依存	・ほとんどなし ・必要最少限	・なし ・近隣をでていくのは、非日常の場合(ハレ)	・一人ぐらし、あるいは老夫婦の場合が多い。	・簡単な自営業(大家、たばこ屋等) ・無職も多い。	・主として戸建持家 ・若い場合は木賃アパート等	・旧くから形成されている市街地	(D)
E 地域生活基地型	・なし ・飯のすまい的、あまり体裁を整えていない場合が多い。	・あり ・職場と一体の場合が多い。	・あり ・職業の関係が、中心である。	・多様	・多様である。	・自営業が多い。(飲食店等)	・戸建て持家(店舗併用) ・木賃アパート ・職場と一体化	・住・商の混在地域	(E)
F 広域生活基地型	・ほとんどない ・第2住居的 ・根拠地的	・あり ・仕事の場として位置づけられていることが多い。	・なし ・直接、広域につながっている。 ・近隣社会として成立していない地区の場合がある。	・あり	・多様	・多様だが、他に比べると自由業が多い。(芸術家等)	・賃貸住宅が多い。(マンション等) ・第2住居の位置づけ(別荘・アトリエ・根拠地)	・都心等、利便性の良い地域 ・根拠地	(F)
G 寄生型	・なし ・へヤ的、飯のすまい的である。 ・他に実家等により補完している。	・なし ・寝る場所としての位置づけ。	・あり ・実家等が近くにあることにより、関係が深い。	・多様	・核家族 ・若夫婦が多い。 ・一人ぐらしもある。	・ホワイトカラー ・ブルーカラー ・学生	・賃貸住宅 ・給与住宅 ・実家の補完的位置づけ。 ・飯のすまい、へヤ的	・新興住宅地に多いが、全域的	(G)
H ねぐら型	・なし ・食事等も外部に依存している。	・なし ・寝る場所だけの住居	・なし	・流動的、移動的だが、あり。	・一人ぐらし ・共稼ぎ夫婦	・ホワイトカラー ・ブルーカラー ・学生	・木賃アパート ・ねるだけの住居	・全域的だが、特に木賃アパート地域	(H)

次にそれぞれの生活型の段階的同心円領域における日常生活行動の展開を模式化すると、図-6のようなモデルが予想される。この模式図の見方は図-7に示すが、図の名称を仮に金魚マップとしておく。

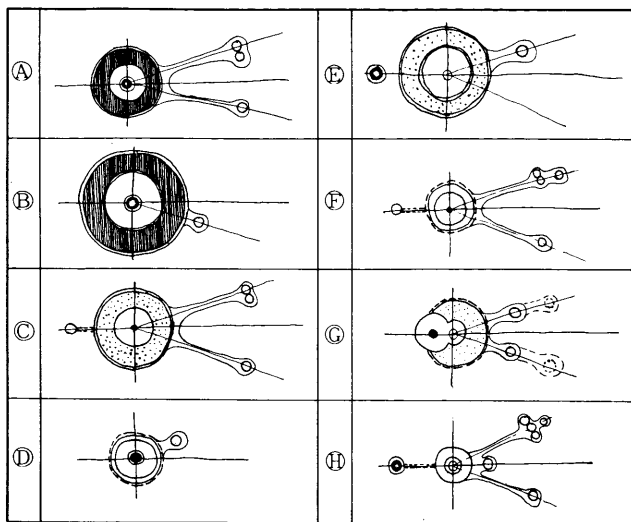


図-6 生活型と金魚マップ

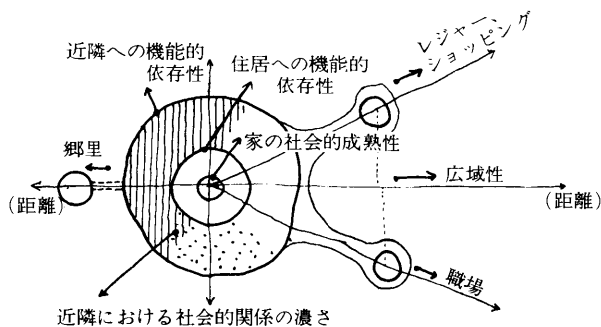


図-7 金魚マップのみかた

(d) 8つの生活型による各種相関

表-20 地区と生活型の集計結果

	千 田	中野本町	赤 坂	経 堂	谷 原	計
広域定着型	27	37	22	41	33	160
地域定着型	55	22	5	14	19	115
マイホーム型	31	24	31	34	32	152
たこつぽ型	9	8	7	8	5	37
地域生活基地型	18	11	3	6	11	49
広域生活基地型	3	6	11	7	7	34
寄 生 型	9	11	15	21	22	78
ねぐら型	6	10	13	22	10	61
分 類 可 能	7	1	6	17	21	52
無 回 答	36	17	14	16	12	95
計	201	147	127	186	172	833

表-21 定住型と生活型の集計結果

	定住型	定住志向型	通勤型	分類型	不 明	計
広域定着型	77	26	14	27	16	160
地域定着型	71	10	3	20	11	115
マイホーム型	68	24	17	22	21	152
たこつぽ型	17	5	3	5	7	37
地域生活基地型	17	8	5	10	9	49
広域生活基地型	10	9	11	6	1	34
寄 生 型	20	24	16	5	13	78
ねぐら型	10	21	19	4	7	61
不明 (分類不能)	16	9	9	8	10	52
無 回 答	23	7	9	10	46	95
計	329	143	106	111	144	833

表-22 住居類型と生活型の集計結果

	戸建て持家	分譲マンション	戸建て借家	木質アパート	鉄骨アパート	公営住宅	船と住宅	長 屋	その他併用住宅	無 回 答	計
広域定着型	96	9	9	17	3	8	8	0	8	2	160
地域定着型	81	4	2	7	5	2	4	2	4	4	115
マイホーム型	91	12	10	12	8	4	5	1	4	5	152
たこつぽ型	20	2	1	3	3	1	2	1	2	2	37
地域生活基地型	24	2	4	11	2	0	2	0	3	1	49
広域生活基地型	10	4	1	7	3	5	0	1	3	0	34
寄 生 型	30	8	9	9	3	3	8	3	4	1	78
ねぐら型	16	5	1	19	6	3	3	2	5	1	61
不明 (分類不能)	23	2	2	10	0	2	5	1	1	6	52
無 回 答	46	3	5	16	3	0	1	2	3	16	95
計	437	51	44	111	36	28	38	13	37	38	833

表-23 職業と生活型の集計結果

	専 業	自 営	月 給	ホウイトカライ	フルタイムカライ	サビレ系職業	臨時雇	学 生	家 事	無職その他	無 回 答	計
広域定着型	53	25	7	30	21	5	0	0	2	13	4	160
地域定着型	19	53	2	16	13	1	0	0	1	6	4	115
マイホーム型	39	35	14	23	15	4	0	0	3	13	6	152
たこつぽ型	8	13	2	1	3	1	0	1	0	5	3	37
地域生活基地型	7	22	2	7	4	2	0	1	1	2	1	49
広域生活基地型	8	2	7	8	1	2	0	2	1	3	0	34
寄 生 型	17	14	7	23	10	3	1	2	0	0	1	78
ねぐら型	18	8	4	15	6	6	0	1	0	0	3	61
不明 (分類不能)	10	11	3	14	5	3	0	0	0	6	1	53
無 回 答	4	6	2	9	1	1	0	0	0	5	6	95
計	183	189	50	116	79	28	1	9	8	53	88	833

表-24 家族人員と生活型の集計結果

	1 人	2 人	3 人	4 人	5 人	6人以上	無 回 答	計
広域定着型	7	23	26	56	32	16	0	160
地域定着型	7	12	25	37	24	10	0	115
マイホーム型	12	29	27	41	24	16	3	152
たこつぽ型	8	16	6	4	1	2	0	37
地域生活基地型	3	6	6	17	11	5	1	49
広域生活基地型	5	8	7	9	3	2	0	34
寄 生 型	4	11	19	30	10	3	1	78
ねぐら型	12	20	9	12	6	2	0	61
不明 (分類不能)	9	4	10	20	2	7	0	52
無 回 答	8	11	8	10	11	6	41	95
計	75	140	143	236	124	69	46	833

あ と が き

本概要では各種相関の意味や考察にまで触れていないが、きわめて興味深い結果が得られた。準備不足の為、本概要では、方法の概略の提示と、単純結果の発表にとどめ、詳しくは、研究報告書本篇に展開したい。

この方法によって、一つには生活構造研究の空間的側面を補うことができれば辛いであるし、また定住型と生活型という観点を是非とも、住区計画や、コミュニティ計画、また集団住宅設計の為の技術概念として適用できる様に、発展させたいものである。御批判、御示唆を、大いに期待するものである。

本篇（大都市篇）担当

重 村 力 （早大産専講師・東洋大講師）
（象設計集団・集落都市研究所）

井 上 赫 郎 （首都圏総合計画研究所）

井 上 隆 （ ” ）

協力

平 井 秀 一 （象設計集団・集落都市研究所）

鷹 森 康 仁 （早大大学院吉阪研究室）

小 菅 克 己 （ ” ）

原 子 力 （早大理工学部）

栗 田 淳 （ ” ）

川井田 哲 （ ” ）

白 岩 隆 夫 （ ” ）

宮 田 敏 郎 （ ” ）

なお、この研究を進めるに当って早大吉阪隆正教授から貴重な御示唆をいただきました。

<農 村 篇>

○富山県城端町における住居を中心とした農村生活空間調査（現代農村生活における定住のしがらみと生活行為の都市化）

1. 「方言地名」による農村生活空間の把握

農村においては、定住の型として（農村とは永々と定住していく人々によって作られてきた居住環境である。）空間的には集落を形成しそこに、社会的な単位としての班（組）・部落を重ね合わせてきた。これがまず農村居住に対する基本的認識である。すなわち、住戸一戸だけではなく、それを取り巻く幾段階もの空間領域で定住の安定を確立してきたと考えられる。農家は農業を営む生活単位であり、その生活を支える器を主として住宅と屋敷（宅地）におきながら、その周辺に何ヶ所かの農地山林を保有しているので、住生活の確立は住宅との関係でほとんど解決しながらも、農地と屋敷とを別々の系にあるものとして切り離す事が出来ないでいる。むしろ、一連の生産行動の中で強く結びつけているので、屋敷利用は生産と生活が混在し複奏した土地利用となっている。（かつては、住宅の中でも生産活動の占める割合が強かった。）ひいては、住生活が屋敷を越えた領域とも強く結びつかなければならぬ様になっている。この領域を農村の住生活を考える時の、ムラ生活空間領域と名付ける。生活行動圏や土地所有圏もこれと関係する。

ところで、そのムラ生活空間領域を具体的に、しかも視覚的に教えてくれ、さらに心的な位相をも包含しているものがある。

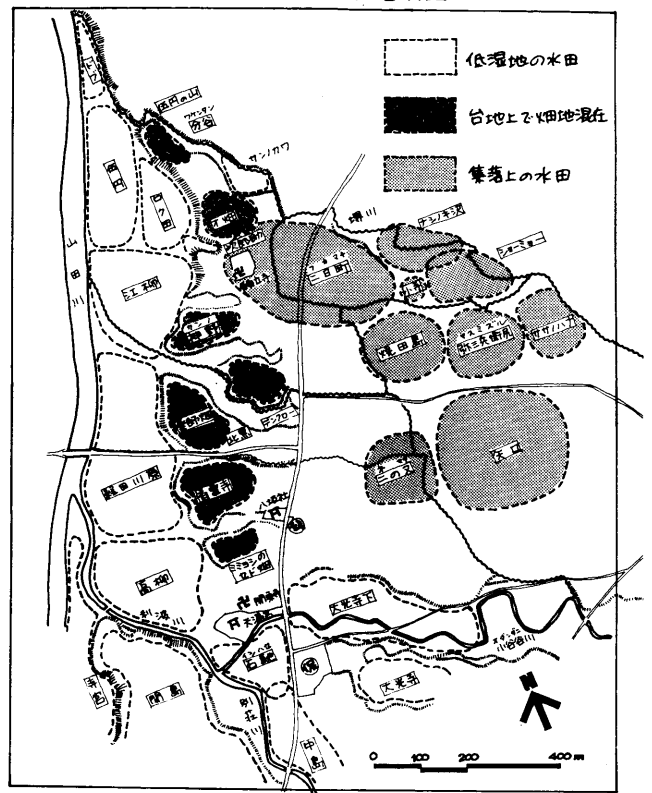
それは、「方言地名＝自らの土地の言葉」という、自らの生活空間領域を構成的に認識させている、言葉の分布である。農村にあっては集落周辺のなにげない森や、小区画ごとの土地になじみ深い実に数多い地名が存在する。それが「方言地名」である。

我々は、農村での定住生活の様相を明らかにするために、この「方言地名」を先導にして切り込んでいく事の有効性を、各地での調査で確認してきたが、今回砺波平野における調査でも、農村の持つ段階的同心円領域の存在が見てとれた。

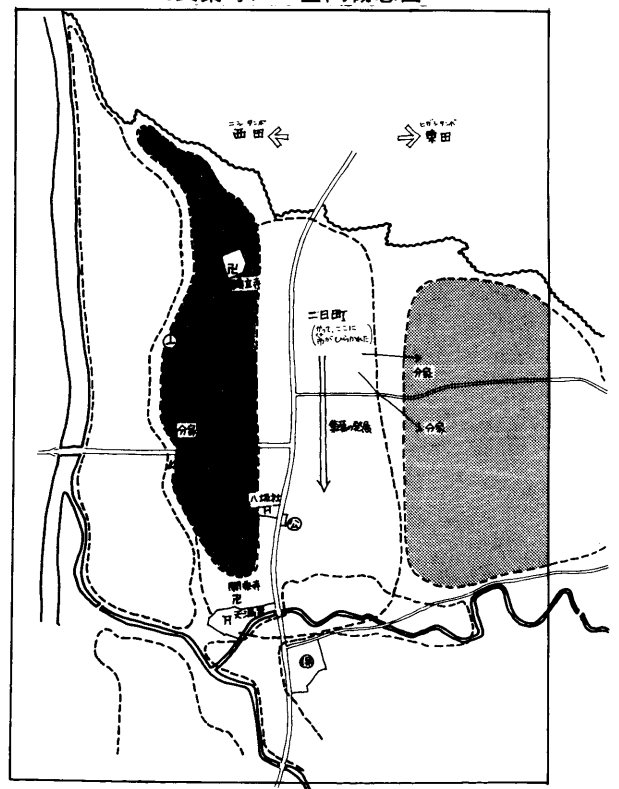
「方言地名」は具体的に一つ一つ取り出す事の出来る独立した言葉であり、生活行動といった捉えにくいものとは違って、ある程度客体化できるものである。又、地域空間に直接対応した言葉であるので非常に視覚的である。したがって、「方言地名」により、ムラの生活空間領域の構成（組み立て）を知り、その意味を知り、さらに言葉の持つ被記憶性と土地利用の変化との関係からムラ生活空間領域の動態を知り、言

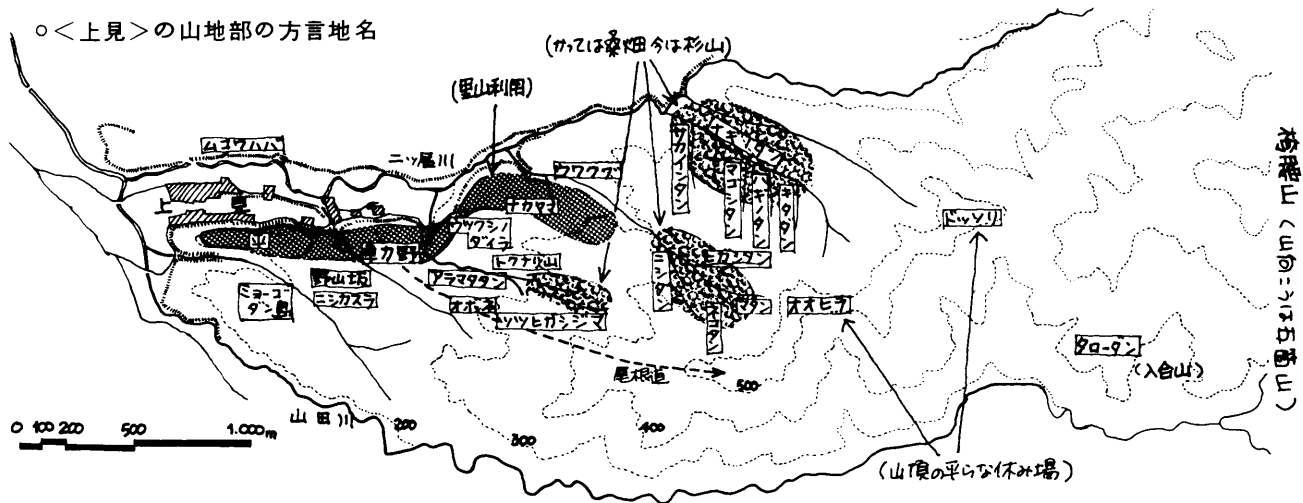
葉が社会性を持つという本来的性格によって空間と集団との関係をも了解していくという事が出来るわけである。この「方言地名」をていねいに拾い上げていけば、その時に、農家の住生活がどの様な段階的空間構成を持ち、その中でどの様に定住を安定化させているのかが、かなり明解に浮かび上がってくる。

<長楽寺>の方言地名図

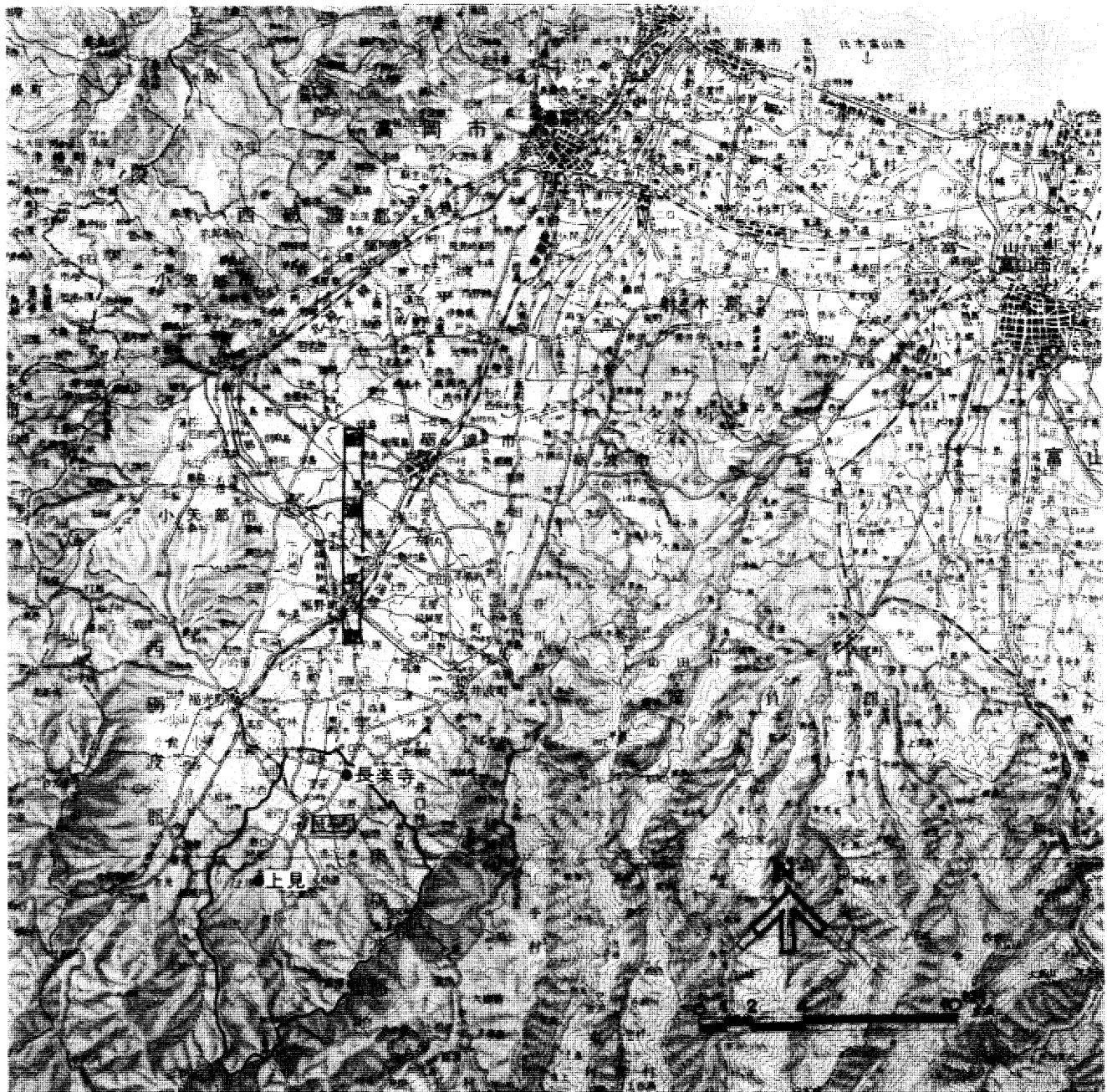


<長楽寺>の空間概念図

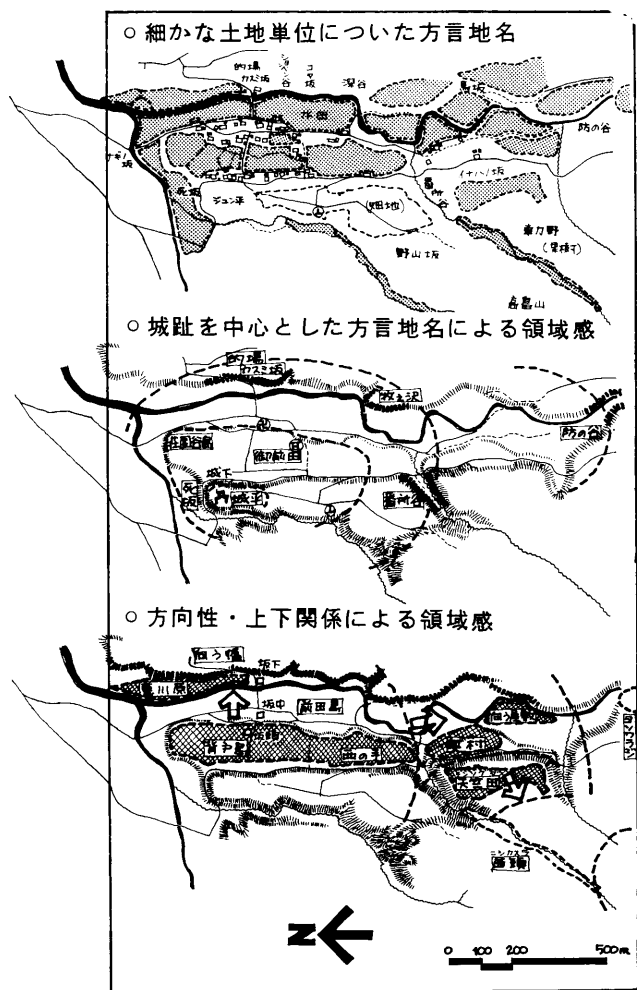




砺波平野における城端町位置図



<上見>の方言地名図



2. 農家住宅の矛盾と解消

さて、今回富山県の城端町の平地と山麓の2つの典型的な農村集落で、「方言地名」の調査を中心に様々な角度から農家の住生活を明らかにしていく調査を行った。「方言地名」の調査によって、ムラ生活空間領域がかなり収縮化、あるいは空疎化している事がわかったのであるが、それと大いに関係する、農業生産の単作化、兼業化、あるいは生活行動圏の広域化の実態を探ってみた。又、住生活の内容や意識がかなり都市化してきていると思われるが、50戸近くに及ぶ、農家住宅プラン、屋敷利用プランの採集と分析によってこの構造を客観化しようとした。今まで受け継いできた農家生活と、「開発されてくる新しい生活」のイメージとがどの様に住宅プラン、屋敷利用プランの中で具体的にぶつかりあっているのかを見たわけである。

このことにより、農家住宅とそのに現在住まう家族の生活との間に様々な矛盾が存在する事。あるいは、矛盾解消への動きも活発である事が見てとれた。それらは、次の様に見出して整理できる。

① 表から入る、裏から入る

あまり、使用頻度のない接客用の空間が表に面し、農家の日常的利用の居室は裏にあるのだが、屋敷への入り口は一ヶ所で、住宅内の表裏の逆転はなかなか起こっていない。

② 個室化への動き

住宅内部での個室の独立化への動きが強く、個室は独立化していくと共にその数を増やしている。

③ 接客用空間の合理化

かつては浄土真宗（一向宗）の信仰によって住宅の中心を占めていた接客用の空間が最近になって、縮小されたり、配置変えされる様になってきた。

④ だんらんの空間の独立化と分立化

農家住宅も家族生活を重視する様になり、だんらんの空間が住宅の中心になりつつある、しかし、家族は生活時間をここでの食事とテレビでしか共有していない傾向もある。

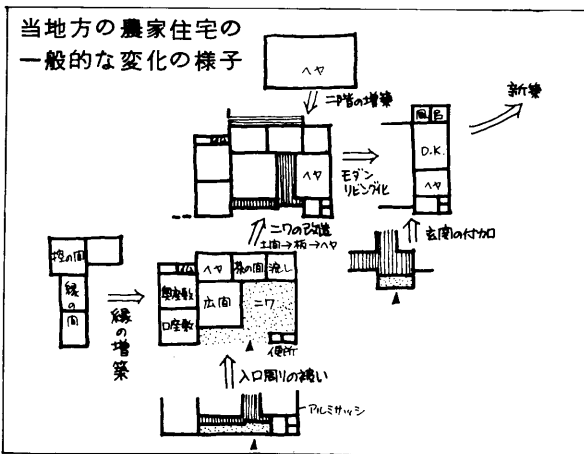
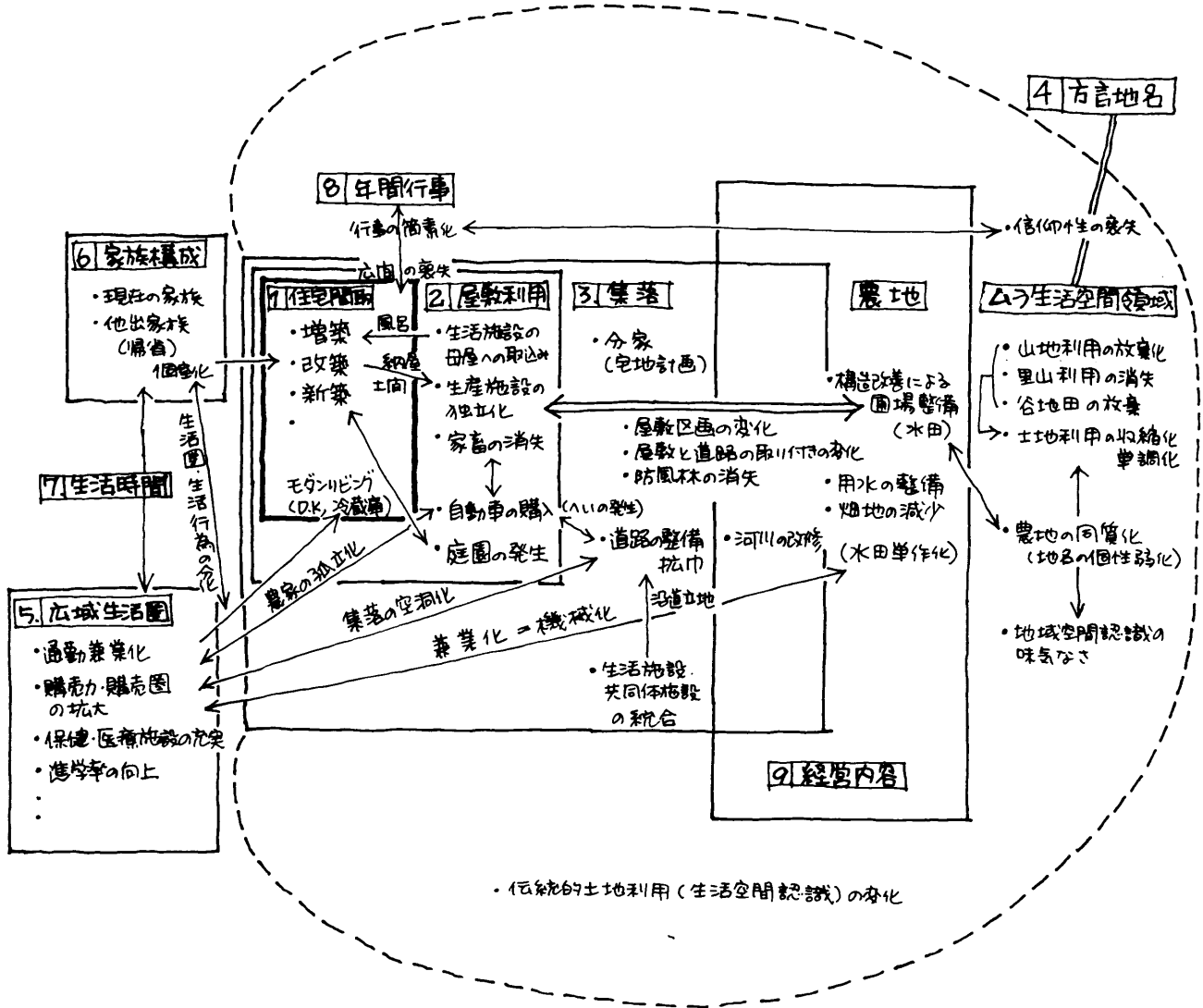
⑥ 設備空間のモダン化

生産行為を住宅外部へ放り出す反作用として、住生活を充実させる設備空間が住宅内に完全に取り入れられる様になった。住宅利用の大転換である。

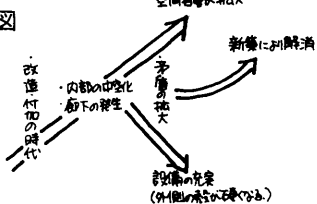
こうしてみると、全体に家族生活を重視する方向に農家住宅は向かっている様に見られるのだが、合理化は完璧になされているとは言い難い。農家住宅とその時の家族生活とは一対一には対応し得ず、ズレ合っただけである。そして、農家住宅は永続する家族（家）に依然として対応しているのではないだろうか。いつも矛盾と合理化への動きが存続している。合理化の中にも存続する矛盾は農村の定住の重み、農家住宅の重みを意識させる。

この重みと矛盾は先に述べた住居を中心にして同心円的に存在する段階的な構成を持ったムラ生活空間領域の中で、定住環境の総体として安定と、解消の方向へ向う様である。

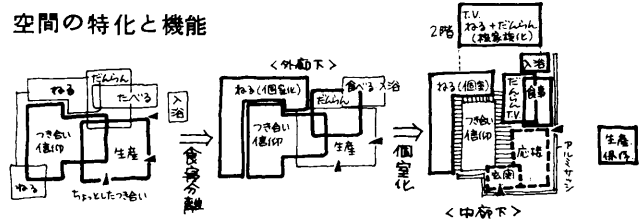
調査項目とそれぞれに起こっている変化



変化の概念図



空間の特化と機能



研究責任者 平井 秀一 (象設計集団・集落都市研究所)

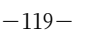
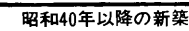
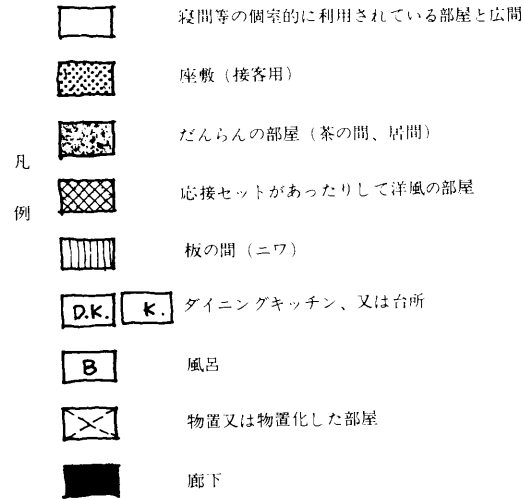
協力者 重村 力 (早大産専・東洋大講師)

新井 精一 (早大・大学院)

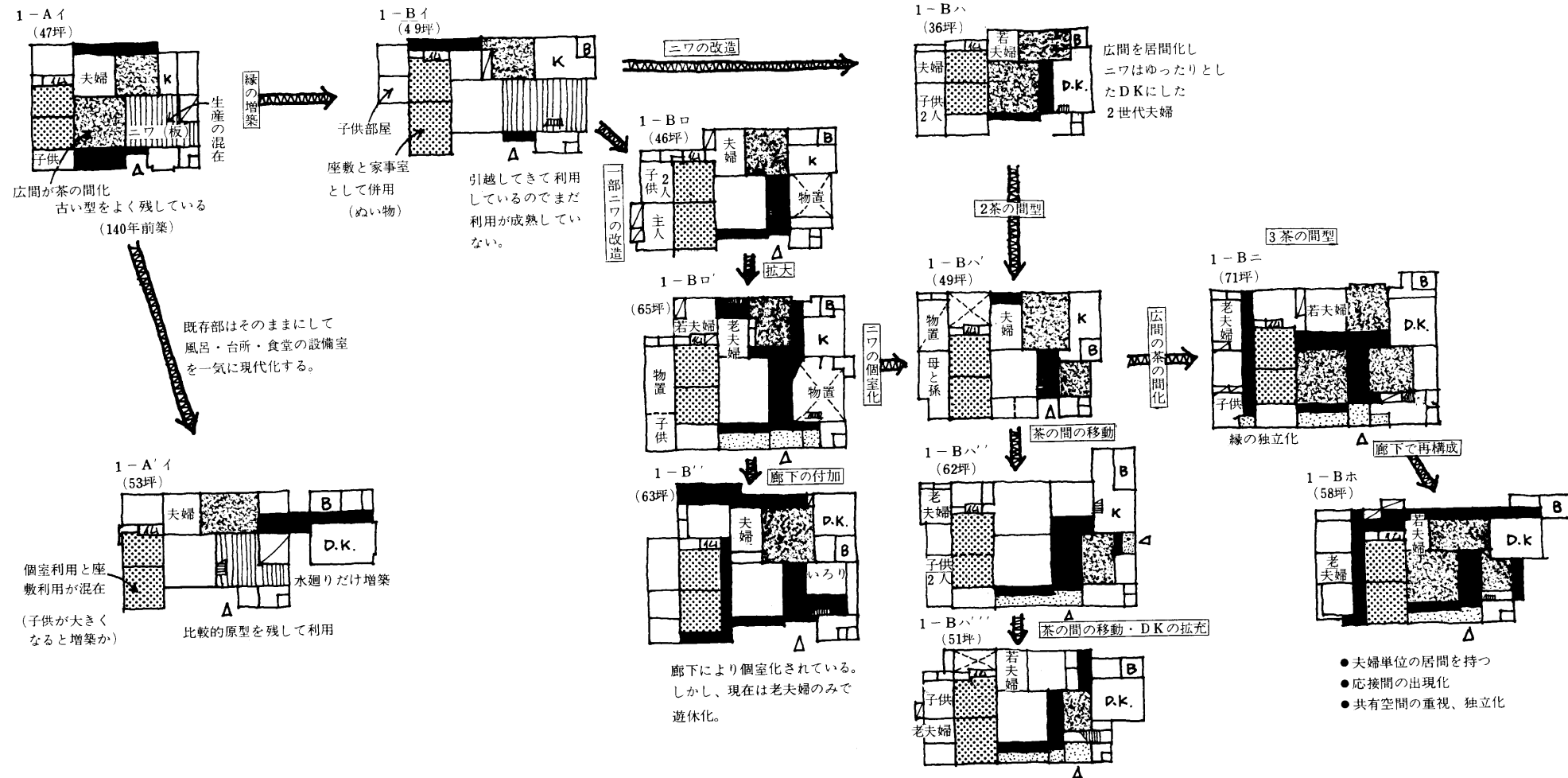
橋本圭次郎 (早大・学生)

妹尾 訓明 (")

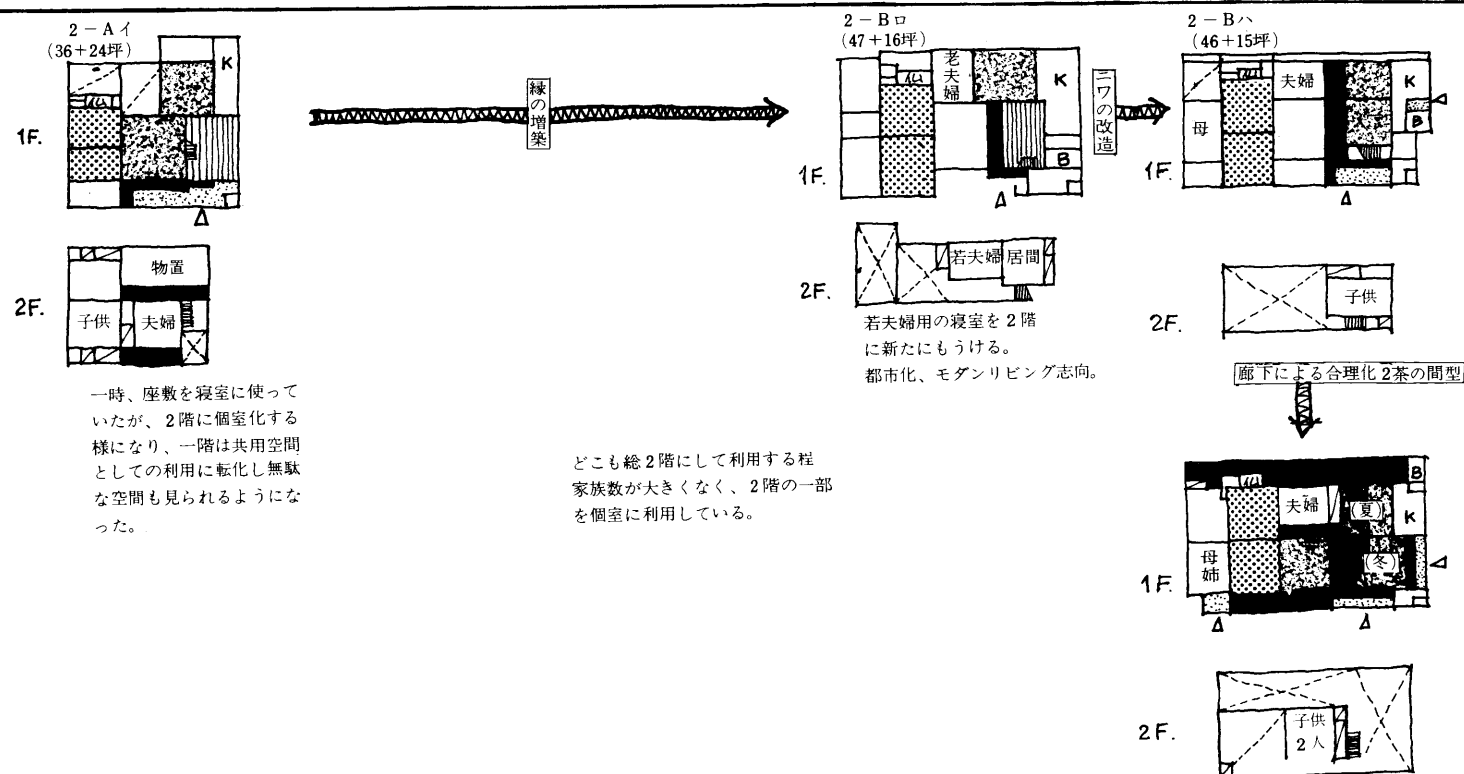
1階建て



1階建て



2階建て



新築した家の特色としては

- 広間の喪失
- 玄関の独立
- 中廊下型の発生

2階建てにすることによって、二世代夫婦を上・下に
分けたり、下を共用、上を個室に分けたり、立体的
に機能分化させている。又純生活的になっている。